

ケースで学ぶ日本事情

海外の教師（及び学生）支援のために

雄谷 進（国際交流基金・日本語国際センター）

Susumu_Oya@jpf.go.jp

sususmu_oya@hotmail.co.jp

【要約】

海外の大学において日本語学習者が日本語に興味を持って学び続けるには、彼らの興味・関心を引く知識を与えることだと考える。その一例をケースで学ぶ日本事情として、ベトナムで実験授業を実施した。今回はそこから見えてきたことについて考察をおこなう。

1. はじめに

国際交流基金の調査によると、海外で日本語を学ぶ学習者数は増加の一途をたどっている。

（2009年海外日本語教育機関調査より）

表1 世界の日本語学習者数

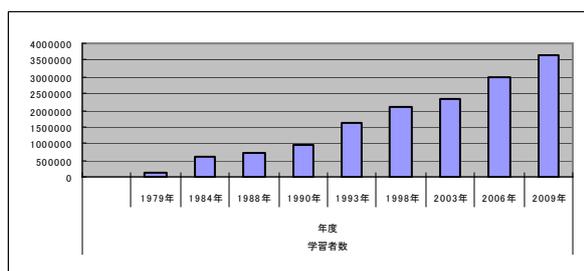
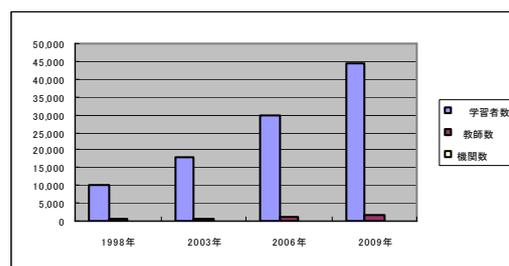


表2 ベトナムの日本語学習者数



今回対象とするのはベトナムである。ベトナムは2006年から2008年まで2年間赴任しており、今後も大学での日本語教育の発展が期待される国と考えるためである。ベトナムの大学において日本語がわかり始めた3年生、4年生段階では、それぞれの専門科目が多くなり、日本語教育にあまり時間が注がれていない。これはカリキュラムの影響もあると思われる。そこでベトナムの大学の現状を踏まえ、将来日系企業への就職やあるいは日本留学、さらには日本研究への一歩にもつながる3年生、4年生対象の日本事情授業の何か新たな取り組みが大切だと感じた。

「ベトナムで日本語を学んでいる学生、その彼らを教える先生方に日本について知らせたい、それもできれば映像をつけて」と考え、これまで日本事情に関連したケース集めに取り組んできた。参考となる資料・情報は新聞記事、テレビ経済番組、雑誌、本などが中心である。

確かに日本経済はこれまでの高度成長というわけにはいかないが、それでもベトナムにおいては日本から学べるヒントがたくさんあり、そのヒントが私たちの日常生活には多く転がっている。

例えば、地方再生に向けた取り組み（葉っぱビジネス）、少子高齢化に対応した（大人のおむつ）、日本のサービス（おもてなし）、地方、離島の不利を克服する技術（冷凍技術CAS）、環境にやさしく日本農業の復活に向けた（無農薬りんごなど）である。

2. 本研究の目的

海外の大学において日本語学習者が日本語に興味を持って学び続けるには、現在の日本でどんなことが話題になっているのか、ベトナムとどう違うのかといった彼らの興味・関心を引く日本事情に関する知識が必要であろう。

ところがベトナムに限らず、海外の日本語教師は日本へ来る機会が少ない。その結果として学生の関心が高いと思われる日本事情に弱くなる。国によっては日本人の教師が多い場合も見られるが、ベトナムは未だその段階には達していない。

一方、近年日系企業のベトナムへの進出が盛んであるが、日系企業側は日本語ができる優秀な学生の確保を希望している。当然学生も学んだ日本語を生かせる日系企業での就職を目指すという図式が出来あがる。

そのことを踏まえ、ベトナムの学生に少しでも日本の企業理解に結ぶつく日本事情に関する情報とを考え、大学で日本語を学ぶ学生対象に実験授業をおこなってきた。そして近い将来において自分の学校に日本人教師がいなくても、ベトナム人教師だけで日本事情の授業を行えるよう一つのモデルを示すことができればと思う。

さらにもう一点は、この研究を続けることでベトナムの日本語教師と常に連絡を保つことができる。この点がこれまで構築したベトナムの大学教員とのネットワーク継続を維持し、ベトナムの日本語教育に少しでも貢献できる一つの試みでもあると考える。

3. ベトナムにおける日本語教育の課題

- ① 学習者数急増に伴う日本語教師不足
- ② 日本語教材不足（日本で市販されている教材がベトナムで手に入らない）
- ③ 地方教師への支援強化（ハイフォン、フエ、ダナン、ダラット、カントーなど）
- ④ 日本語を学ぶ学生への支援
- ⑤ 日本文化紹介の不足

4. 課題解決策としての取組み

① 教師不足の解消として、ハノイ国家大学・外国語大学で日本語教員養成コース（学部レベル）がスタートしている。さらに日本語教員養成や日本研究者育成を目指した大学院も 2009 年 11 月にスタートし、ハノイ大学も 2010 年 10 月にスタートした。

② 教材不足の解消に向けては、現職の日本語教師を中心に、中学校・高校で使用するための教材作成が進行中である。

③ 地方教師への支援強化は、地方に日本語教育の裾野が広がることにより、日本語のできる・日本を理解するベトナム人が増えることにつながる。そのため地方教師への支援に欠かせない教師対象のセミナーを実施した。

④ 学生支援の一つの試みについては、ベトナムの大学において日本語学習者対象の日本語セミナーを実施した。実施大学と参加人数は以下のとおりである。

貿易大学、タンロン大学、人文社会科学大学、ハノイ大学、ハイフォン私立大学、フンドン大学、ダナン外国語大学、フエ外国語大学など 8 校で実施、参加学生数は約 1400 名である。

⑤ 日本文化紹介、日本事情紹介について、日系企業等から日本語だけでなく日本文化を理解する

人材養成への要求が高まっていた。そこで多分野にわたる日本文化や日本事情紹介を展開することで、多くのベトナムの方が日本語学習、日本研究へと進むことを期待し、様々なイベントをおこなった。

5. ケースで学ぶ日本事情の実験授業から

ベトナムの先生方、学生に対して、実際にベトナムにおいて授業を行い、アンケートを収集、分析した。ベトナムで実験授業実施の経緯は以下の通りである。

①2008年11月現地予備調査（実験授業依頼、ハノイとハイフオンの大学3校）

②2009年4月 第1回実験授業実施、トピックに関するアンケート実施

（ハノイ、ハイフオン、ホーチミンの大学 5校で実験授業を実施）

③2009年8月 第2回実験授業実施、トピックに関するアンケート実施

（ハノイ、フエ、ホーチミンの大学 3校で実験授業を実施、加えて次年度に向けた実験授業依頼（対面インタビュー、電話インタビュー）（ハノイ、フエ、ダナン、ハイフオン、ホーチミン）

④2010年6月 現地予備調査 新たな実験授業の実施依頼、取り扱うトピックに関するアンケート実施（ハノイの大学 3校で実験授業実施を依頼）

⑤2010年9月 第3回実験授業を実施、授業に関するアンケート実施

（ハノイの大学 3校で）、今後に向けた課題等について対面インタビュー、電話インタビュー実施（ハノイ、フエ、ダナン、ハイフオン、ホーチミン、ビエンホア 6地域）

現地ベトナムでおこなった実験授業後のアンケート結果から、学生が求めている（望んでいる）のは、「実際に教師から教室で授業を受けたい」ということであった。

上記のことを踏まえ、ベトナムでたとえ年に1回でも、日本事情に関する授業ことは意義があると考ええる。

6. 教師、学生からの感想等について

1) 教師、社会人サイドから

- ・ 参考となる資料等が授業を行う際に参考になった、
- ・ 資料があると、勉強になる
- ・ 役に立つ
- ・ 面白い

2) 実験授業を受けた学生から

- ・ とても面白い
- ・ 役に立つ
- ・ 今回のような授業が好き、こんな授業を受けたかった
- ・ これからも今回のような授業を受けたい

7. ベトナムでの実験授業から見えてきたこと

年に数回現地での学生に対する対面実験授業とアンケート調査実施により、ベトナムの先生方と接触することで、現地ベトナムの日本語教育事情も知り得る。このベトナムの日本語教師や学生との定期的な接触・情報共有は海外での日本語教育支援をおこなう上で貴重なものであるし、遠いベトナムの現場から定期的に情報が入り、またはこちらからも情報を提供できる体制が整ったと思える。

8. 「ケースで学ぶ日本事情」授業に向けた一つの案について

これまでの資料と実験授業、アンケート結果などから取り扱うトピックに関し一つの案を考え、2010年6月にハノイの2大学でアンケートを試みた。結果は以下の通りである。(回収アンケート数：192名) この結果をもとに授業で取り上げるトピックを再度ベトナムの教師と検討の上、来年2014年以降ベトナムのどこかの大学で15回シリーズを行いたいと考えている。

図1

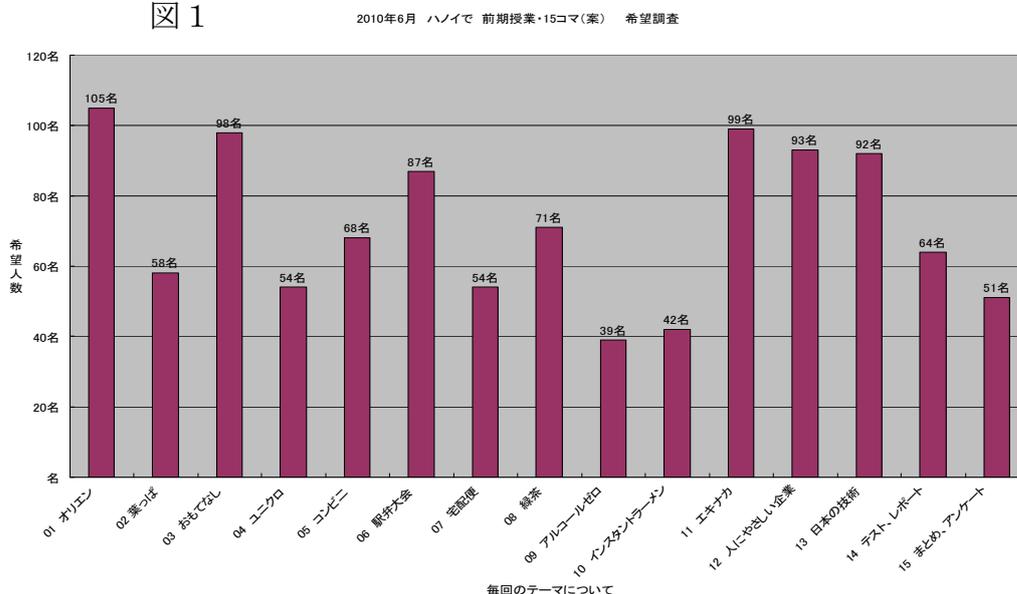
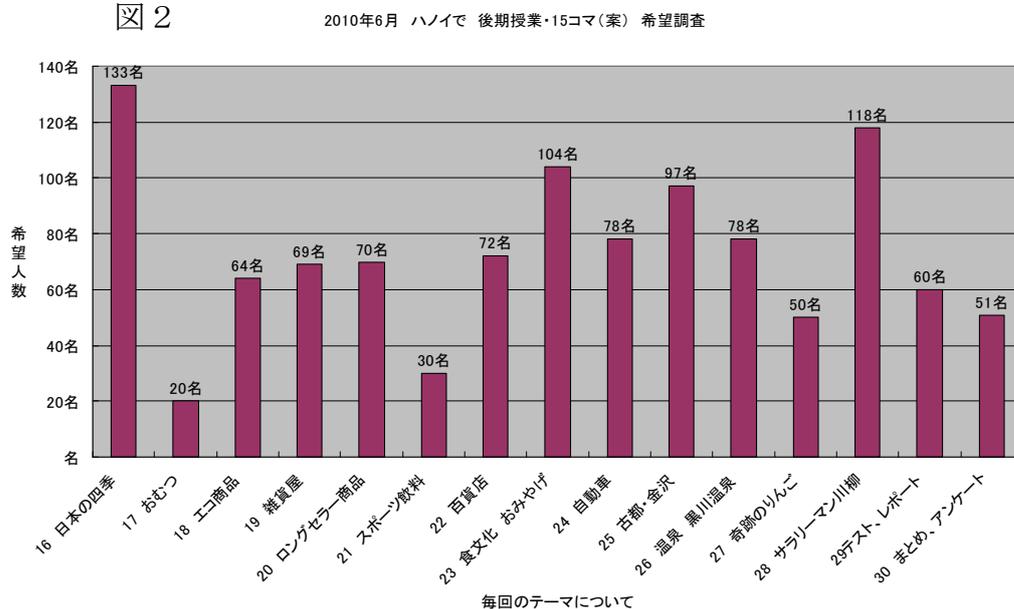


図2



9. 最後に：今後への課題

1) ベトナム側との日程調整

年に数度（これまでに5度）ベトナムでの調査と実験授業を組み合わせせておこなっているが、ベトナムの学期（授業期間）との調整がやはり難しい

2) トピック選びとアンケート調査人数の重要性

これまで進めてきた資料を利用したベトナムでの実験授業、アンケート結果から、15回分の授

業を組み立てる段階までできた。この15回分のトピック選びがとても重要になる。2010年6月に実施した学生へのアンケート人数はわずか192名であり、しかもハノイのみである。やはりベトナム各地（ハイフォン、ダナン、フエ、ホーチミン、ビエンホア、カントー等）でのアンケート実施をおこない、十分なデータを取り15回分の授業トピック選びが大きな課題として残る。

3) トピックごとの授業資料作成作業

トピック選定と同時に、各トピックの授業資料作成が今後の大きな作業となる

以上、海外で「ケースで学ぶ日本事情」実践のため、課題の解決をはかりながら、一步一步じっくりと研究を進めていきたい。